二重目的語動詞 promise の意味分析に関する小稿

植　田　正　暢

1　はじめに

二重目的語構文が表す意味は一見すると一様ではなく，それゆえ過去の研究では複数の意味クラスを立てることで多様な意味を説明しようとしてきた。(cf. Green 1974, Oehrle 1976, Gropen et al. 1989, Goldberg 1995 など) その一方で，意味クラスの間にはどのような関係があるのかという問題も論じられてきた。(cf. Goldberg 1995, Kay 2000, Koenig & Davis 2001) 本小稿では，promise という動詞の意味分析を通して二重目的語構文の意味をどのようとらえるべきかを考察することを主眼とする。これは，事象の参与者の物理的な位置関係ではなく，主語の意図世界に注目することによって二重目的語構文の複数の意味クラスの間の関係がとらえることが可能になることを示唆するものでもある。

2　先行研究

2.1　プロトタイプの意味特徴とその逸脱例

議論の出発点として，二重目的語構文のプロトタイプから始めよう。プロトタイプの意味特徴について過去の研究で確立されているコンセンサスを明示すると，おおむね次のように記述することができる。

---

* 本小稿はThe Second International Conference on Construction Grammar (2002年9月7日，於：ヘルシンキ大学) で発表した“A Usage-based Analysis of the English Ditransitive Constuction”の内容の一部を敷衍してまとめたものである。

(1) ① Agent（以下，Ag）から Recipient（以下，Rec）へ Patient（以下，Pt）を渡す。
② その結果，Rec は Pt を受け取る。
③ この授受行為は必ず実行される。

(2)の例では典型的な二重目的語動詞である give が用いられている。ここでは Rec である小包が Pt のところまで届かなかったという文脈に埋め込まれているが，これは(1)の③に反するため不自然な響きになる。

(2) a. # I gave him the package but it didn't move.
b. # I gave him the package but he didn't get it. (Kay 2000：6)

プロトタイプから逸脱する例では(1)-③を必ずしも含意しない。ここでは本稿で中心的に取り上げる promise という動詞を例にあげて見ることにしよう。

(3) Joan promised Bill $10.

多くの先行研究での分析（cf. Goldberg (1995), Koenig & Davis (2001) など）に従うと，(3)は「Bill が Joan から10ドルを受け取るということは，Joan が約束を履行する限りにおいて実現するものである」という解釈を受ける。裏を返せば，約束が守られなければ当然，Bill は10ドルを手にすることはないのである。これを本稿での二重目的語構文のプロトタイプ的意味(1)に照らして言い直せば，(3)は必ずしも(1)-③を含意するわけではないということになる。

そもそもプロトタイプ理論による二重目的語構文の意味分析の出発点は，(1)のような特徴づけにあり，この特徴づけにそぐわない事例が存在するために，プロトタイプからの拡張という形で説明する必要が生じたと考えられる。本稿であえて問いたいのは，出発点である(1)を事象の参与者間の位置関係から意味分析をするという方向性がそもそも正しいのだろうか。(2)の例は今まで暗黙のうちに了解されてきた意味分析の視点を映し出すもので，(2)で用い

られている動詞 move や get は明らかに物理的な位置関係がどこにあるかを示そうとするものであると推測することができる。確かに二重目的語動詞の中には throw や take のように物理的な位置関係に言及しなければ，その語彙意味特徴のすべてをとらえることができないものもあるが，二重目的語構文全般を研究をするには物理的な位置関係から離れたところから見るべきであると考える。この主張はこれからの研究の積み重ねによって証明すべき点であるが，さしあたりこの小稿では promise という動詞を中心に取り上げ，物理的な位置関係に言及することがあまり意味をなさないことを論じていく。

2.2 Koenig & Davis (2001)

(3)のような例をどのように扱うかが理論構築の際の問題として近年の先行研究で論じられてきた。本稿では特に Koenig & Davis (2001) を中心に，折に触れその論文が批判的検討を加えている Goldberg (1995) に言及しながら，二重目的語構文がどのように扱われているかを紹介したい。

Koenig & Davis は Head-driven Phrase Structure Grammar (以下，HPSG)の枠組みで項構造と統語構造の対応関係の問題を扱い，その中で二重目的語構文についてもふれている。彼らの主張は，動詞の意味内容に situational core と sublexical modality の 2 つの構成部分を設け，前者は参与者役割に関する情報を担い，後者は動詞固有の（広義の意味での）モダリティに関わる情報を扱うとしている。このように構成部分を分けることによる利点は，一見すると正反対の意味を表しているようにみえるが，同じ統語構造に現れることができる動詞をうまく扱うことができるところにあるという。これは Goldberg (1995) が提唱した「構文の多義性」について彼らが指摘した問題点の 1 つの解決策となる。Goldberg では二重目的語構文に張り付く多様な意味を構文レベルでの多義性を認めることにより，説明を試みている。Goldberg では，ものの授受に関係する意味のみで 6 つの意味クラスが設定されている。当面の議論に関わるクラスのみを取り上げると，Goldberg はプロトタイプ的意味（中心的意味）を (4A)，そこから polysemy link によって結びつけられる意味クラスの 1 つ，C クラスを (4C) のように定義してい

る。

(4) A：Central Sense: Agent successfully causes recipient to receive patient.

C：Agent causes recipient not to receive patient (e.g., *refuse, deny*)

Koenig & Davis はこの 2 つの意味の扱いについて，α という意味をもつ語と$\neg\alpha$ という意味を持つ語の 2 つを「多義」という形で結びつけることに問題があると指摘している。

Koenig & Davis が示した situational core と sublexical modality の 2 つが役割分担することにより，Goldberg の C クラスに含まれる否定の意味は sublexical modality で扱われる情報ということになる。すると，残りの意味内容，つまり「Ag は Rec が Pt を受け取るようにする (Ag causes Rec to receive Pt)」を situational core で共通する情報としてもつことになる。結果として，相反すると思われる意味を持つ 2 つの語がなぜ同じ統語フレームに現れることができるのかということが容易に説明されるようになり，Goldberg のように直観に反する形で「多義」の例とする必要がなくなるのである。

さらに Goldberg の枠組みでは promise などの動詞と結びつくとされる B クラスの意味 (Conditions of Satisfaction imply that agent causes recipient to receive patient) も，C クラスの場合と同様に，「約束が履行されるならば」という条件に関わる部分が sublexical modality にて扱われることになるため，ものの授受に関わる部分を他のクラスと共通する情報として Situational core にて扱われる。

このようにして situational core のレベルで同一の情報をもつため，意味的含意が異なる動詞クラスが同じ統語パターンを示すことが容易に説明される。

実際に Koenig & Davis の分析を見てみよう。Koenig & Davis は Goldberg の分析を受け継ぎ，次のような語彙意味構造を与えている。

(5)
$$\begin{bmatrix} \textit{promise-sem} \wedge \textit{cause-possess-sem} \\ \text{SIT-CORE} \ \boxed{3} \begin{bmatrix} \textit{cause-possess-rel} \\ \text{ACTOR} \ \boxed{1} \\ \text{UNDERGOER} \ \boxed{2} \\ \text{SOA} \begin{bmatrix} \textit{have-sem} \\ \text{SIT-CORE} \ \boxed{5} \begin{bmatrix} \textit{have-rel} \\ \text{ACTOR} \ \boxed{2} \\ \text{UNDERGOER} \ \boxed{4} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix} \\ \text{MODAL-BASE} \left\langle \begin{bmatrix} \textit{deontic-mb} \wedge \textit{condit-satis-mb} \\ \text{SOA} \ \boxed{3} \end{bmatrix} \right\rangle \end{bmatrix}$$

紙幅の都合でこの表示の詳細には触れないが，MODAL-BASE operator の condit-satis-mb が Goldberg (1995) で示された "Conditions of Satisfaction imply that" の意味指定に相当する。したがって，この表示は次のように読むことができる。ACTOR [1]が約束した内容を実現させれば，UNDERGOER [2]/ACTOR [2]は UNDERGOER [4]を手にする。

3　二重目的語構文の意味

3.1　プロトタイプの意味特徴再考

冒頭で設定した本稿の課題―二重目的語構文の意味をどのようにとらえるべきか-に取り組むために，二重目的語構文のプロトタイプを取り上げ，その意味特徴を論じることから始めたい。植田 (2001，2002) および Ueda (2002) の中でもすでに論じているように，二重目的語構文のプロトタイプ的事例ではその意味を記述するのに所有領域における所有関係の変化に着目する必要がある。

二重目的語動詞 give の意味は，Goldberg (1995) に従うと次のように記述される。

(6)　Agent causes Recipient to receive Patient

(6)で receive が用いられているが，そもそもこの receive をどのような意味で用いているのかを問う必要がある。(2)で見たように，過去の研究の中には Rec と Pt の間の物理的な位置関係をもとに規定しようとしていたことが推察されるものがある。(2)の小包は可動物なので，通常は物理的な位置関係が所有関係の規定に重要な役割を果たすが，give の内在的意味として物理移動が指定されているとは考えにくい。次の例を考えてみよう。

(7) a. John gave Harry his bicycle for the day: but the bicycle just sat there the whole day. I guess Harry didn't need it.
(Oehrle 1976：24)

b. "... I gave my ex-wife the house, too," says Lance, ... (COBUILD)

c. Bill gave his house to the Moonies. (Goldberg 1995：89)

いずれの例でも Pt は物理的な移動を被っているわけでない。例えば，(7a) では自転車を使用する権利が一日限りという条件つきで Harry に譲渡されているが，だからといって自転車そのものが Harry のもとへ動いたわけではない。(7b-c) でも同様に家そのものが場所を変えているとは考えられない。このような事例から give は所有権の移動のみを問題とする動詞であると結論づけることができる。

プロトタイプと考えられている動詞の中には明らかに物理的移動の意味を含むものがある。それには throw や hand が該当するが，これらもやはり所有領域における所有権の移り変わりという点から現象をとらえなければ，プロトタイプと見なされている事例間の共通性をとらえることができなくなる。物理領域での位置変化は所有権移動の前提条件にすぎず，物理領域と所有領域を区別して扱う必要がある。議論の詳細は植田 (2001，2002) および Ueda (2002) を参照されたい。

さらに二重目的語構文の主語に関わる制約として，Goldberg (1995) や Kay (2000) の中でも論じられているとおり，主語は意図的動作主である必要がある。主語の意図性はいわゆる *for*-dative の特徴として取り上げられることが

多いが，これは二重目的語表現全般にも観察されるものである。Ueda (2002) で「主語の意図性」について詳しく論じたので，その議論を簡単に紹介する。*for*-dative を例に見ると，主語がもつ意図は動詞が表す動作を起こす前にすでに形成されていなければならず，またその意図は途中で変わってはならない。具体的に(8)の例に則して見てみよう。ここでは二重目的語表現が角括弧に与えられた文脈のもとで用いられている。

(8) [Yesterday Jim baked a cake. He then decided to give it to Mary.]
Jim baked Mary a cake.

主語の Jim が Mary にケーキをあげようという意図を形成したのは，ケーキを焼いたあとになっているため，不自然な表現となっている。Ag は Pt を贈ろうという意図を最初にもつ必要があり，その意図を実現するために動作を行う必要がある。

また次の例では，Max にケーキをあげるという当初の意図が後から you に変わっているために不自然な響きとなる。

(9) # I baked Max a cake, but now you're here, you may as well take it.

つまり，最初に形成された意図はそれを実現するために行われた動作が完結したと見なされるまでは変化してはならないのである。

以上で見てきた主語の意図性に関わる条件が，プロトタイプの事例にも当てはまることを次に見ることにしよう。次の例は Goldberg (1995：10) から引用したものであるが，(10a) では最初の意図が後に変わった例になっており，(10b) ではあげようという意図が当初はなかったことを示す例である。

(10) a. # Joe threw the right fielder the ball he had intended the first baseman to catch.
b. # Hal brought his mother a cake since he didn't eat it on the

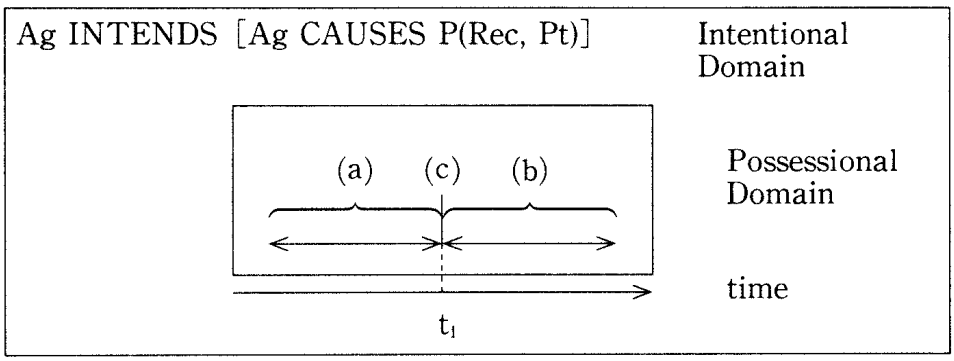
way home.

いずれの例も不適切な文と判断される。

ここまで見てきたことをまとめると，二重目的語構文のプロトタイプは2つの意味領域から特徴づけられる必要がある。1つは所有領域における所有権の移動であり，もう1つは意図世界におけるものを贈ろうとする意図に関わる特徴づけである。所有領域の特徴について説明を付け加えると，所有権の変化は徐々に変化するようなことはなく，瞬間的である[1]。したがって所有権の移動がひとたび起これば，次の瞬間には必ず相手のところへ移っているものである。この特徴こそが(1)-③「授受行為は必ず実行される」という意味合いの出所なのである。もう1つの意図世界では，あらかじめものを贈ろうという意図が形成されている必要があり，それは意図が実現されるまで一貫している必要がある。

このことの概略を図式化したのが(11)である。

(11)



a: prior to t_i, P(Ag, Pt)
b: after t_i, P(Rec, Pt)
c: at t_i, Ag causes the transition from (a) to (b) instantaneously.

(11)の箱の中の1行目が意図世界 (Intentional domain) の意味を表し，その下に所有領域の意味が記されている。関数Pは広義の意味で所有関係を表す。ここで「広義の意味で」という但し書きをあえて付け加えるのは，純粋な所有権の有無を表すだけではなく，一時的にものを使用する権利なども含めるためである。所有領域における所有権の移動は3つの部分から成り立ち，(a)

[1] 詳細は Jackendoff (1992) を参照のこと。

ある時点 t_1 よりも前の時点では Ag が Pt を所有している関係にあり，(b) t_1 よりも後の時点では Rec が Pt を所有している関係になる。そして(c) t_1 の時点において(a)から(b)への変化が瞬時に起こることになる。

結果的に(11)は次のように読むことができる。Ag は Rec が Pt の所有権をもつようにすることを意図し，実際に所有権を移動させた。その含意として生じる解釈が，Rec は Pt の所有権を必ず得ることになるということである。

3.2 *promise*

3.1節では，いわゆる *for*-dative 固有の特徴と思われている主語の意図性に関する意味特徴が，プロトタイプの意味クラスでも当てはまることを述べてきた。これはこの節で扱う promise を分析する際にも重要な役割を担うことになる。

動詞 promise の意味について，中右（1994）は興味深い観察をしている。中右はモダリティと発語内効力の関係について論じる中で遂行発話節と心的動詞節の意味的含意関係を明らかにしている[2]。その中で動詞 promise が取り上げられ，「約束は意図を含意する」ことが論じられている。promise と intend の統語的ふるまいに平行性があることをその文法的証拠としてあげている。

(12) a. I promised your father that you *should* never know he had been in prison.
(=I promised your father that I *would* never *let* you know he had been in prison.)
b. We intend that the bill *shall* become law by the end of the year.
c. (=We *intend* that *we will* let the bill become law by the end of the year.)

[2] 中右（1994）はモダリティの意味を厳密化し，発話時点における話し手の心的態度と定義している。そのため Koenig & Davis が用いているモダリティとは意味が異なることに注意されたい。

中右(1994：89)によると，promiseの基本的な用法は，①主語と補文の主語が一致し，②補文には主語の意図（意志）を表すwillが明示的に生ずるということである。⑿では補文がwillの代わりにshallが使用され，またその主語も主節主語と一致していないが，shall自体が話し手の強い意思を表すものなので，かっこ内のように言い換えることが可能であると述べている。

この洞察をもとに，promiseの二重目的語用法について考えてみたい。*COBUILD*[3]の定義によると，promiseが二重目的語動詞として用いられたときには次のような意味になるという。

⒀ If you promise someone something, you *tell* them that you *will definitely* give it to them or make sure that they have it.（斜字筆者）

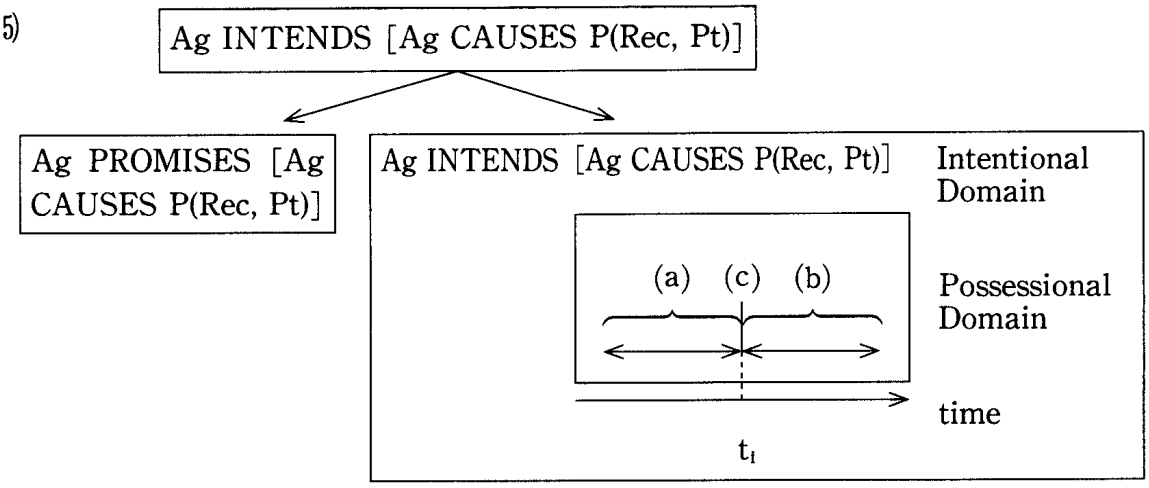
⒀から分かることは，二重目的語用法のpromiseは発話行為を表す動詞であり，さらにその発話により将来ものを譲渡する意図（意志）があることを伝えるものである。この文主語の意図こそがプロトタイプ的事例と共通する特徴であり，贈られるものがどの時点で受け取られるのかという側面よりもこの意味側面こそ重要なのである。

以上をふまえると，promiseの語彙意味構造は次のように表示されると考えられる。

⒁ Ag PROMISES [Ag CAUSES P(Rec, Pt)] (Intentional domain)
(PROMISE ⊃ INTEND)

giveとpromiseの意味的関連性は上位スキーマを介して関連づけられる。

(15)



上位になる［Ag INTENDS［Ag CAUSES P(Rec, Pt)］はプロトタイプとpromiseから抽出されたスキーマに相当する。PROMISEはINTENDのより具体的な事例と見なされる。promiseが'future having'を表すという直観は，プロトタイプの場合と異なりpromiseの語彙意味構造には所有領域における所有権の変化が含まれていない点でとらえられる。

3.3 Koenig & Davis（2001）における分析の批判的検討

ここでは本稿で提示した意味分析をKoenig & Davisの分析と比較した際にどのような理論的意味合いをもつかを論じる。(14)で示した語彙意味構造は，一見するとKoenig & Davisが提示している語彙意味構造と同じことを述べているように思えるかもしれないが，giveとの関連において比較すると本稿で示した構造は質的に異なるものである。本稿で示した語彙意味構造では意図世界の意味構造（Koenig & Davisの枠組みであえて言うならばmodal baseの情報）が，両動詞の間で質的に類似性があり，これによって両動詞が同じ統語パターンを示すことをとらえようとしている。また，giveの意味的含意である「授受行為が必ず実行される」という意味合いは，give（および同じ意味クラスの動詞）特有の意味特徴として扱っている。一方，Koenig & Davisではsituational coreの情報が両動詞に共通する特徴として存在する。giveはmodal baseの値が指定されていないため，「授受が必ず行われる」というgive特有の意味的含意が出てくるが，promiseではmodal baseの値が指定されることにより，その含意がうち消されることになる。たしかに

Koenig & Davis では unification を利用することにより，両動詞が意味的に異なるにかかわらず，同じ統語的パターンを示すことをうまく説明しているように思われる。けれども両動詞に見られる「主語の意図性」という意味的共通性はどこで保証されることになるのかという問題が残る。

4　おわりに

本小稿では，二重目的語動詞 give と promise を取り上げ，物理領域における事態の参与者間の位置関係からではなく，意図世界に着目することによって，この 2 つが意味的に関連のある動詞であることを論じてきた。この方向で研究を押し進めていった場合，どの程度の動詞が同様の手法で説明できるのかによって，この小稿の内容が評価されることになるであろう。

最後にどのような見通しがあるのかに触れて本稿の締めくくりとしたい。Goldberg (1995) で扱われた二重目的語構文の意味クラスの多くは(15)で示したネットワークの中に組み込まれ，[Ag INTENDS [Ag P(Rec, Pt)]] のより具体的な意味構造をもつものと考えられる。1 例を挙げると，bequeath という動詞は「文主語が死亡したときに財産などを残す」という意味を持つが，この場合 [Ag P(Rec, PT)] には，「文主語が死亡したとき」という P が成立する条件が付加されることになると考えられる。

また，Koenig & Davis は charge という動詞を give や promise などと同様に扱おうとしているが，charge は ask などの発話行為を表す動詞と自然類をなすと考えられ，単にものの授受関係からのみその意味構造をとらえるのは難しいと思われる。

以上の 2 点が本稿の延長線上で取り組むべき課題となる。

参考文献

*COBUILD*³ (2001) *Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*. Harper Collins, Glasgow.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, Chicago.

Green, Georgia M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press, Bloomington.

Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander, Richard Goldberg, and Ronald Wilson. (1989) "The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English." *Language* 65, 203-257.

Jackedoff, Ray S. (1992) *Languages of the Mind: Essays on Mental Representation.* MIT Press, Cambridge, MA.

Kay, Paul. (2000) "Argument Structure Constructions and the Argument-Adjunct Distinction." Paper presented at the First International Conference on Construction Grammar.

Koenig, Jean-Pierre and Anthony R. Davis (2001) "Sublexical Modality and the Structure of Lexical Semantic Representations." *Linguistics and Philosophy* 24, 71-124.

中右実 (1994)『認知意味論の原理』大修館書店，東京.

Oehrle, Richard T. (1976) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation.* Ph.D. diss., MIT

植田正暢 (2001)「いわゆる与格交替の間で—「寄付」動詞と二重目的語構文」中右実教授還暦記念論文集編集委員会『意味と形のインターフェィス：中右実教授還暦記念論集』上巻，73-80．くろしお出版，東京.

植田正暢 (2002)「二重目的語構文と動詞の非整合的事例の意味研究」福岡女学院大学短期大学部紀要第38号（一般教育・英語英文学），59-77.

Ueda, Masanobu. (2002) "A Usage-based Analysis of the English Ditransitive Construction." Paper presented at the Second International Conference on Construction Grammar.